

宮 崎 県 の 題 目 板 碑

久 保 常 晴

序

関東地方に広く分布する所謂青石板碑、または関東型板碑と呼ばれるものの中、筆者は題目板碑に古くから注目し、相当量の資料を蒐集し、それ等から本尊様式の種類、分布、年代による基数から宗勢等を概観し、公けにもして来た。⁽¹⁾ しかし、ここ数年間追加すべき新資料にも接せぬ現時点では一応纏めるも大過はないと私考された。この場合、さらに記録に現われた地域的な特色を抽出し、年代と形体の変遷、また、その数量と他の供養塔婆との関連、なお、門派別の分布とその消長等を求めて行くには、地域的に限定されているが、各地に分布している題目板碑との比較を必要とするのである。

この関東型以外のものとして、現在知られている範囲には利根川下流に分布する下総型があり、その概略に就いては既に紹介したところである。⁽²⁾ 畿内には京都・尼崎方面に花崗岩・砂岩製の背光形で、二条の横線は勿論、頂部と身部との境に突き出た額をもつ畿内型のものの中に僅かながら報告され、その分布の周辺に当る紀伊(和歌山県)にも同型のものが、なお、同型の凝灰岩製、笠塔婆浮彫のものが能登(石川県)に少量知られている。東北では陸前(宮城県)・岩代(福島県)に相当数存在し、九州には日蓮宗の宗勢から筑前(福岡県)・肥後(熊本県)には多数発見される可能性も考えられるが、板碑の所在は知られているにもかかわらず、題目板碑については寡聞にして、その所在の報文には接していない。ただ日向(宮崎県)には各宗の板碑は勿論、比較的多くの題目板碑の存在が知られている。この九州には形体上、石質から地方的な類型がたてられ、九州型板碑と云われるものがある。つぎにその概略に就いて述べてみたい。

九州型板碑

板碑の研究の沿革からするならば、比較的古い時点の大正2・3(1913～4)に河野清実氏は豊後(大分県)で発見された塔婆が関東中心の板碑に相似た形体をとっているとしながら、当時の学界が関東型のみを板碑としていたため、板碑と称することに踏み切れず、板碑の碑にこだわらず、「板碑様の古碑」また「板碑系統の碑」と表現し、記念のためなる碑として本質的に異なる語を使用していた。⁽³⁾ 同6(1917)年に到って池上年氏は福岡附近に見られるものは凝灰岩・砂岩製で、関東型とは石材を異に

するが、形状・様式を同じくする故に、これを板碑と呼ぶとしている。この考えは後に多くの研究者の賛同を得て、各地に相似のものを板碑と称する動機を与え、また古い資料と認めたものをもって、板碑は一石五輪塔からの変形と、その過程を多くの図版をもって述べ、起源に対する一説を公けにした。その挙げた資料は水城の観世音寺・宮崎町將軍地藏・九大構内・志賀島小学校を含む13箇所60基で、文明12(1480)年・天文20(1551)年等のキリク(弥陀)の種子を主とし、地藏・大日種子をも含んだものであった。⁽⁴⁾ 同年瀬之口伝九郎氏は鹿児島県鹿野市高須波上社に形体が豊後と同一系統のもので、鎌倉時代末の元弘2・3(1332～3)年・正慶2(1393)年・嘉暦3(1328)年の弥陀を刻めるものを報じ、また喜田貞吉氏が大分県で板碑を調査し、熊本県にも存在せることを追加し、九州に広くかかる板碑の分布することに触れ、この点に関して「島津・大友氏の如き関東に往来したものの、之を輸入すべきは必然の事」と伝播経路を考察している。⁽⁵⁾

以上触れて来た九州型板碑の形体は頂部三角形で、下部に厚い方錐形を呈し、長い身部との境に逆切り込みの2条の横線を両側面までめぐらし、これに接して突き出た額部を持つもので、さらに身部下方にも額同様な張り出しを有し、裏面を背光形の如く、一部加工または自然のままとしたもの、あるいは方柱状としたものである。関東型には身部上方に額をもち、逆切り込みの2条の横線をもつもの古式なものの一部に認められるが、一般には見られず、また石質上からも板状の薄手な相異点が見られるのである。

大正12(1923)年に坂本真鈴氏は天草本渡町舟尾に弥陀の立像とサ(観音)・サク(勢至)の種子の享禄4(1531)年在銘のものを挙げ、⁽⁶⁾ さらに大正14(1925)年には水田勲氏は福岡県鞍手郡下境村須賀祠の建武3(1336)年板碑を報じ、⁽⁷⁾ 翌年中島利一郎氏は水城・箱崎町等15個所で、3～40基存在することを述べ、九州式石卒塔婆の名称を提唱した。⁽⁸⁾ 以上僅々10年余で、福岡・鹿児島・熊本・大分・長崎の諸県と、その地域は勿論、基数も増大されていった。しかしその中には、必ずしも大いさ、本尊等に克明な表現はなされていないものが多かった。

昭和に入ってから資料の集成が県単位に行われ、年表の形式で発表する風潮も生れ、3年から始まった日名

子太郎氏の調査の結果は『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯に板碑の所在10余箇所が挙げられ、南北朝の宇佐郡佐田村大年神社の暦応4(1341)年在銘のものを始め、大野郡宮尾村回春庵の慶長14(1609)年板碑迄の18基が収録された。同8年には服部清五郎氏は『板碑概説』で、これ等を九州型と一型式を設定し、大分県国東町川原の元応2(1320)年在銘のものを最古のものとし、さらに彼の有名な国東の富貴寺にある仁治2(1241)年在銘の古式な傘塔婆の影響によって、この地方の板碑が出現したと、その起源の一説を公けにした。この傘塔婆起源説は当時多くの信奉者を得たものであった。その後、同17年宮崎県では瀬之口伝九郎氏によって『宮崎県史蹟天然記念物調査報告』(日向ノ金石文)第12輯が刊行され、その中に金石文資料を459件年表式に記載され、さらにその中板碑は約半数の206件が収録された。九州各県中板碑造立の最盛地域であることを示し、特に題目板碑は板碑中の3分の1に近い60数基を占め、南関東に

次ぐ分布の密度濃い地域であることも明らかにしていた。

本書は当時に於いて、収録件数の多い点では右翼に位置するものの一つであったが、現時点からすれば、刊行以来30年に近い歳月を経ている故、その後の発見もあって追加すべき資料の存在も考えられるし、形体上の記録にも、なお観察を必要とする面も考えられ、一昨年夏、特に濃く分布する地域を選び現地調査を行った。これによって予想通り相当数の新資料も得た。またその結果として、最も中心と目すべき定善寺で、前著に記載された40数基の貴重な資料の銘文は宗義上から、復原も困難なまでに磨り消されてしまっていることを知った。文化財尊重の叫ばれている現在、かかる行為は宗義上とは云え、特に日蓮宗関係の中世資料の乏しいことも考えれば、誠に遺憾に絶えぬ次第である。

つぎにこれ等の題目板碑の資料を紹介し、2～3の考察を加えてみたい。

資 料

- (1)番号は原則として年代順とした。85は追加、86は記銘中の僧侶名から日蓮宗のものと判断して取扱った。
- (2)西暦は1,000年代が共通なので省略した。
- (3)銘文中の南〇経は南無妙法蓮華経の略。
- (4)所在は同一個処に多数の資料のものが、数箇所あるため略号をもって示した。
 - (A)東諸県郡高岡町柳馬場本永寺
 - (B)日向市日知屋本善寺墓地
 - (C)東臼杵郡門川町北ノ内墓地
 - (D)日南市伊比井本源寺墓地
 - (E)日向市財光寺定善寺墓地
 - (F)日向市細島妙国寺境内墓地
 - (G)児湯郡新富町新田本蓮寺
 - (H)宮崎市生目妙円寺址
 - (I)日向市細島地藏寺墓地

- (J)日向市美々津町高松
- (K)日向市細島妙国寺門前
- (L)都城市二蔵寺墓地
- (5)資料欄の○印は実見したもの、◎印は実見したものゝ中の新資料を示した。他のものは『日向ノ金石文』に記載されたもの。
- (6)大いさの単位はセンチメートル。長さ、幅、厚さの順に記述し、幅の()は下部を記した。次に●は額の高さを、▲は額の張出しの奥行を示した。実見したものゝ中、△印をつけたものは三角形の高さ一二条の線の高さ一額の高さに細分して示した。また、上方欠損、下部欠損のものについては上×・下×とした。○は円相の印次の()はその径の長さ。下方の張出しの高さはゴチで示した。
- (7)備考には『日向ノ金石文』を基にし、誤を訂正した。

番号	西暦	銘 文	資料 所在	大 き さ	備 考
1	401	妙祐 南〇経十三 応永八年	A	長 幅 厚 215.1—31.5—20.0	
2	465	若持法花経 為信芳法洽□ 南〇経 右志者増進也 是身甚清浄 寛正六 ^{乙酉} 正月卅日	◎ B	48.4—28.4—20.8 ○ (不明) △ 16.3—6.1—18.0 ▲ 1.2	
3	473	文明五年 ^{癸巳} 南〇経 日蓮聖人 二月彼岸	C	77.2—21.5—15.1 12.2 ▲ 3	

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
4	502	為 妙親逆修 南○経 文亀三年二月廿□日	B	80.6—不明—不明	
5	513	沙弥法授 南○経 永正十年□□□□	○ D	63.2—19(20)—10.8 △ 7.8— 4.5 — 5.5	日授は沙弥法授 干時はなし,
6	514	如来一切 奥女 南○経 自在神力 永正十一年 ^{乙亥} 九月	E	81.7—不明—11.8 △ 1.8	干支からすれば十二年に相当する。
7	514	斯人行世間 為大菩提也 南○経 日要上人 能滅衆生闇 永正十一年	F	108.6—26.6—18.7 ● 16	大等は大菩提
8	515	比丘尼妙恵 南○経 永正十二才 ^{乙亥}	◎ D	上× 57.0—18(17)—9.3	
9	515	信力堅固者 南○経 沙日義 諸仏弟子衆 永正十二年 ^{乙亥} 七年	E	100.2—23.7—14.8 ▲ 1.3	汝は沙
10	515	如来一切 日會 南○経 所有之法 永正十二年 ^{乙亥} 八月日	E	115.1—23.3—17.6 ● 15.4 ▲3.7	足は之
11	515	如来一切 南○経 秘要之藏 永正十二年 ^{乙亥} 八月吉日	E	100.6—21.2—14.3 ● 12.5 ▲ 0.9	妻は要
12	517	是人於仏道 阿闍梨日□ 南○経 決定無有疑 永正十四年 ^{丁丑}	E	下× 99.1—23.6—13.9 ● 9.4 ▲ 2.3	
13	518	唯我一人 為日要上人 南○経 能為救護 永正十五年十一月十□	G	64.5—19.7— 8.4	
14	519	華経 妙信? (左側) 永正拾六天 ^{己卯} 八月	D	上× 400.6—12.7— 8.7	
15	525	如来秘密 奉造立願主日□ 南○経 日目上人 神通之力 大永五天 ^{乙酉} 二月彼岸	○ D	66.0—16.8(16.3)—11.0 △ 3.3— 0.6— 7.0 ▲2.8	秘の次の□は密示は之。造立の次に願主とある。日目上人ともある。
16	525	斯人行世間 開山日興上人 南○経 能滅衆生闇大永五天 ^{乙酉} 二月彼岸	○ D	68.5—16.2(15.2)—11.5 △ 不明— 2.9— 2.8	能の次の□は滅
17	525	而実不滅度 蓮華経 日要上人 常住此説法 大永五天 (右側) 玄処及要林	○ D	上× 30.0—16.0— 9.8	而の次の□は実滅は滅及の次の□□は要林日要上人とある。南〜法はない。

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
18	526	右意趣者本化沙門 日快逆修之菩提奉□ 能開甘露門 御金言者本門壽量之 南○經 □文也如此依功德現当 廣度於一切 二世之祈願成就無疑 者也 大永六年 ^{丙戌} 二月十二日	E	123.6—24.2—17.6 ○(4.3) ● 19.4	於の次の衆生は一切
19	527	能開甘露門 右為者 南○經 日蓮逆修 ? 広度於一切干時大永七年 ^{太才} 三月十四日	○ B	90.8—26.6—20.0 △ 15.0— 2.4—19.5	日蓮逆修の蓮は解せぬ
20	528	南○經 日釧 (左側) 大永八天	D	上× 48.5—17.5—14.8	
21	528	南○經 為妙□ 大永八天 ^{戊子} 九月六日	◎ B	68.0—15.9(16.7)—8.7 △ 7.9— 3.0— 4.8 ▲ 0.6	
22	530	相当沙弥道義一百ヶ日 汝等可服 奉訪善根也就中所顯 南○經 真文也依是等功要有 速除苦惱 縁無縁法界平等利益 干時享祿三年 ^{庚寅} 二月十日 孝子 敬白	○ B	98.7—25.4—17.8 △ 15.0— 4.9—17.0 ▲ 1.6	
23	530	善尼 南○經 妙祐 逆修享祿三年二月十一日	◎ B	102.0—24.6—17.0 △ 10.4— 5.0—18.0	
24	531	為比丘尼妙□□大井 是人於仏道 依是奉建立塔婆是 南○經 右志者諸仏悉深奥然衆 決定無有疑 生濟度□□法界平等 享祿四年 ^{辛卯} 八月廿五日	○ B	76.3—19.3—14.8 △ 不明— 4.4—12.7 ▲ 1.8	井は井
25	531	為伊東祐邑御戒名 十方仏土中 天惣御菩提奉造□ 南○經 右為者依是等功要 唯一乗法 六親眷属七世父母 平等正覺乃至法界 享祿四年 ^{辛卯} 八月廿五日	B	84.9—22.4—13.9 ● 10.6 ▲ 1.7	
26	533	我有大乘名? 法正逆修也 南○經 名妙法蓮華經 天文二年 ^{癸巳} □時正	B	80.0—24.5—11.8 ● 11.6 ▲ 2.1	南無の次の孫は妙、 時正の上に如は理解 できぬ故□とする 妙の上に名あるべき はず
27	533	此土安穩 妙玉逆修 妙法蓮華經 人常充滿 天文二年 ^{癸巳} □□□	B	上× 48.4—23.6—15.1	安の上の□□は此土 充の上の□□は人常
28	538	乗此宝乘直至道場 南○經 天文七年 是因縁十方講求	◎ B	73.4—20.2—11.8 △ 6.0— 5.0— 6.5 ▲ 1.9	
29	538	常在靈鷲山 南○經 及余諸住处 天文七年 ^{戊辰} 二	H	116.7—25.4—17.6	

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
30	541	一切皆当 南○経 得成仏道 天文十年 ^{辛丑} 六月	E	83.5—23.3—15.4 ● 13.9 ▲ 1.8	
31	542	情存妙法故天文十一年 ^{壬寅} 三月二日 南○経 悲母妙金 身心無懈倦	E	98.2—24.6—14.2 ● 11.5 ▲ 0.9	心の次の然は無
32	542	能於来世誦持此経天文十一年 ^{壬寅} 四月 南○経 所修者平朝臣 是真仏子住淳善地 逆修	◎ B	85—22(23)—17 △ 9—5.4—8.7 ▲ 3.7	
33	542	遂致得成仏 天文十一 南○経 道金 今故為汝説	E	93.6—24.8—14.8 ● 11.5 ▲ 1.2	致の上の逐は遂
34	544	南○経 天文十三	◎ B	69.4—26.6—19.2 △ 9.5— 3.5—13.6 ▲ 0.8	
35	562	□□□念 日□ 南○経 元二道□成就 永禄五	H	145.4—48.5—25.8 ● 6.7 ▲ 1.5	
36	563	為阿日恵菩提 南○経 永禄六年 ^{癸亥} 七月廿五日	E	84.5—24.5—15.8 ○(10.3) ● 13.6 ▲ 1.2	
37	566	若有聞法者 □了信 南○経 聖□□ 無一不成仏永禄九年 ^{丙寅} 八月時正	◎ F	99.2—22.7—14.0 ○(不明) △ 6.1— 3.8— 8.8 ▲2.4	
38	567	能開甘露門 南○経 広度於一切 永禄十年	I	上× 不明—27.2—不明 ○(10.3) ●10.2	□比□は能開甘
39	567	不染世間法 為妙蓮? 南○経 如蓮華在水 永禄十	B	82.1—22.1—16.3 ○ (9.7) ● 16.7 ▲ 2.1	
40	568	是好良薬 為妙意 南○経 今留在此 永禄十一年 ^{戊辰} 二月時正	F	102.1—25.8—17.9 ○ (9.7) ● 24.2 ▲ 1.2	
41	568	現世安穩 為我了逆修 南○経 後生善処 永禄十一季 ^{戊辰} 二月時正	○ F	114.0—28.1(27.9)—18.5 ○(不明) 23.7— 3.7—10.0 26.5	年は季
42	568	若在仏前 為比丘尼妙心菩提 南○経 蓮華化生 永禄十一季 ^{戊辰} 二月時正	○ F	107.0—23.0—15.5 △ 6.6— 0.9— 3.9 ▲ 0.9 1.3	仏の上の十法は若 在年は季
43	568	現世安穩 為正善 南○経 後生善処 永禄十一年八月廿一日	○ B	上× 22.0—22.4—13.7 ● 15.1 ▲ 1.3 12.7	

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
44	568	是人於仏道 為妙心菩提 南○経 永禄十一年九月 決定無有疑 廿九日	E	89.1—23.3—15.5 ● 11.2 ▲ 1.2	定の次の天は無
45	568	雖示種々道 道心菩提 南○経 永禄十一年九月 其実為仏乗 廿九日	E	128.2—25.1—16.3 ● 13.9 ▲ 2.7	示の上の碓は雖種の 下の人々は、仏の下 の衆は乗
46	569	若在仏前 南○経 蓮華化生 永禄十二 _巳 二月十三日	E	88.7—25.4—13.9 ● 12.4 ▲ 1.2	若の下右は在
47	572	現世安穩 為日永阿闍梨逆修之菩提 南○経 右 後生善処 元龜三天 _{壬申} 二月廿三日	E	64.8—24.2—20.0 ○ (7.8) ▲ 2.7	
48	572	是人於仏道 為妙益御菩提 施主 南○経 謹以 敬白 決定無有疑 元龜三季 _{壬申} 三月七日	○ E	126.3—33.8(33)—21.6 ○ (11.4) △ 8—5—16.6 ▲ (2.8) 9.7	題目の下に謹以とあ る
49	572	是人於仏道 右志者為沙門日拾菩提 南○経 弟子敬白 決定無有疑 干時元龜三季 _{壬申} 十月日	E	80.9—19.7—12.1 ● 9.7 ▲ 0.9	
50	572	正直捨方便 為沙門日弥逆修也 南○経 但説無上道 元龜三季□月□□	E	71.5—23.3—12.4 ● 11.2 ▲ 0.9	
51	574	斯人行世間 逆修三十五日追善？ 南○経 為妙遠菩提之 能滅衆生闇 天正二年 _{甲戌} 十月廿日	B	70.0—21.5—15.5	逆修と追善と共にあ るは解せぬ
52	575	是人於仏道為信者慶含三十三 _ヲ 廻 南○経 右志者仏果増進仍法界利益 決定無有疑 願主日現敬白 干天正三季 _{壬戌} 主霜月十七日	J	105.8—25.1—15.5 ○ (12.1) ● 20 ▲ 0.9	
53	576	令我及分身天正四年子五月廿八日 ○南○経 為蓮淨 減度多宝仏 日高惣右衛門尉	D	85.7—27.9—不明 身部に円相 (8.9)	減度の次の□□是多 宝
54	577	乃至不受 為悲母□□ 南○経 右志者 余経一偈 天正五年□□□	D	74.2—17.0—13.0	不の下□は受、経 の下□は一、次の 福は偈
55	581	我亦為世父 為妙珍三十三忌□ 南○経 右志者 施主敬白 救諸苦患者天正九年 _{辛巳} 七月十一日	○ D	73.9—17.2—12.5 △ 6.5—4.0—6.2	世の下の人父、諸 の下の君悪は苦患、 三十の次に三忌□と、 また施主敬白ともあ る。 年の下は表の如し。
56	582	為道寿菩提也 経 天正十年 _{壬午} 七月□□	D	上× 30.9—17.2—10.3	

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
57	582	無二亦無三 為妙寿逆修 南○経 七分全得 除仏方便説天正十才 ^{壬午} 七月廿一日	◎ D	79.0—17.2(18)—9.3 △ 8.8—3.7—4.3	
58	583	妙円 南○経 天正十一年七月□十二日	○ D	72.0—19.2(19.9)—9.0 △ 9.7— 4.0— 4.3	
59	585	沙門直教 南○経 天正十三 ^{乙酉} 文月	B	78.2—24.8—18.4 ● 13.6 ▲ 0.9	
60	588	斯人行世間 南○経 妙禪 能滅衆生闇 天正十六年八月	B	67.8—21.2—15.1 ● 11.8 ▲ 0.6	滅の下の永世は衆生
61	588	法信菩提也 蓮華経 天正十六年 ^{戊子} 十月	E	上× 37.9—22.4—15.8	
62	589	為法脰菩提也 南○経 干時天正十七年 ^{巳丑}	F	95.4—24.2—17.5 ○ (7) ● 16.4 ▲ 0.6	
63	591	道清菩提也 孝子 南○経 天正十九年 ^{辛卯} 敬白	B	82.3—25.5—16.9 ● 18.5 ▲ 0.6	
64	591	是人於仏道 為宗□ 南○経 右志 決定無有疑 天正十九年 ^{壬辰} 九月	◎ F	113.5—35(35.5)—20.7 ○ (不明)14.5 △ 19.5—5.5—12.0 ▲ 0.9	
65	592	於此経中 為悲母妙雲菩提也 南○経 右志□□ 力所不及 干時文禄元年 ^{壬辰} □月	◎ F	上× 67.0—25.0—13.0 ▲ 2.4	
66	592	化一切衆生 南○経 文禄元年 皆令入仏道 二月	B	112.4—21.8—17.3 ● 14.8 ▲ 0.6	一の上の花は化
67	592	是人於仏道 願主□□ 南○経 右為日□□ 文禄元年 決定無有疑 二月	○ B	102.0—31.4—20.0 △ 10.4— 1.6— 5.5 ▲ 1.9	願主, 右為・等認められた
68	594	為法香頓証菩提也 南○経 文禄三天 ^{甲午} 七月十三	○ D	84.5—17.5(16.5)—9.5 △ 9.7— 2.5— 5.2	天以下の□□□は表 の如し
69	596	為妙高 南○経 文禄五年 七月十二日	○ D	73.0—19.6(18)—9.0 △ 8.3—4.4—4.8	妙の次の□は高 十の次の□は二
70	597	若持法花経 為後者□信侃了 南○経 其身甚清浄慶長第貳年 ^{丁酉} 十月九日	◎ K	105.0—21.9—12.7 △ 14.5— 4.2—10.8 2.3	

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
71	600	現世安穩 為道慶逆修也 南○経 後生善処 慶長第五 ^{庚子} 禰月	B	84.6—24.5—11.5 ○ (9.1)	
72	600	云何女身為悲母妙助菩提増進法靈 南○経 速得成仏 慶長五年 ^{庚子} 八月	◎ K	93.5—26.5(27.1)—18.2 △ 15.4—51.0—10.4 ▲ 7 25	
73	602	於我滅度後 二 南○経 慶長七年 月 応受持斯経 日	◎ F	92.4—29.2(28)—20.0 ○ (不明) △ 21.6— 3.0—10.1 ▲0.8 4.5	
74	608	□□□□ 南○経 慶長十三年 ^{戊甲} 九月 日	I	82.1—21.2—16.1 ○ (8.5) ● 15.1 ▲ 2.1	
75	611	□□□□□ 南○経 慶長十六年 ^{辛亥} 三月	I	103.9—30.0—19.7 ○ (9.1) ● 19.7 ▲ 1.5	
76	611	蓮弥 南○経 慶長十六年	E	100.6—21.8—16.3 ○ (9.4) ● 11.5 ▲ 0.3	
77	612	南○経 慶長十七年 ^{壬子} 二月廿? 日	I	86.4—26.4—18.4 ● 15.1 ▲ 2.7	
79	612	大持国天玉 (カーン) 大広目天玉 慶長十七年 南無多宝上行大士 鬼子母神 南○経 日蓮大菩薩 為妙隆尊靈 南無釈迦浄行等 十羅刹女 八月十二日 大毘沙門天玉 (ウーン) 大増長天玉	L	67.0—22.1—不明	
79	612	□□□□□ 南○経 □□慶長十七年 ^{壬子} □月 日	I	82.7—26.4—17.2 ● 20 ▲ 1.8	
80	613	今正是其時 南○経 決定説大乘 慶長十八年八月	◎ F	75.2—20.5(21)—12.4 △ 12.0— 2.1 — 8.2 ▲ 0.4 15.2	
81	613	慶長十八年 我此土安穩 (カーン) 鬼子母神 三光天子 多宝天龍八部天照大神 南○経 唱導師日蓮大士 逆修 為日清大徳之所 四大天王 釈迦地神天神正八幡宮 天人常充滿 (ウーン) 十羅刹女 九月十四日	L	79.4—24.5—15.8	地神の次の永神は天神か或は水神か
82	614	若持法華経 為信者□女 南○経 三回追善 其身甚清浄 慶長拾九 ^{甲寅} 年八月 日	◎ K	○ (不明) △112.2—37.2—20.0 ▲ 0.4 27.7	

番号	西暦	銘文	資料所在	大 き さ	備 考
83	615	□□□□□ 南○経 慶長廿年 ^{乙卯} 四月七日	I	103.9—27.2—17.5 ○ (9.1) ● 18.2 ▲ 1.5	
84	615	□□□□□ 南○経 □□□慶長廿年八月廿日	I	102.1—27.8—18.7 ○ (9.7) ● 20.7 ▲ 1.2	
85	530	沙弥 是人於仏道 南○経 決定無有疑 道久 逆修 善根也 享禄三 ^{庚寅} 二月	E	72.1—19.7—14.2 ● 10.3 ▲ 2.4	
86	577	天正五 丑 当山九日現阿 五月廿四日	E	67.8—12.1—不明 ○ (7.6) ● 10.3 ▲ 0.6	

分 布 と 伝 播

『日向の金石文』年表以外に前記の如く、日向市日知屋本善寺・細島妙国寺、日南市伊比井本源寺で新資料を得ているので、必ずしもこの年表では充分尽し得たとは云い得ない。しかし、これ等の実見した資料は分布の中心で発見したものであるが故に、結論には過誤を招くとは思われない。

まず、最初に日向(宮崎県)の板碑の分布を観めることとする。年表に掲げた資料中、①東臼杵郡南郷村の神門神社の応永8年のものは目次に板碑とあるが、表中には板絵とあって、その内容正しく板絵である。②西臼杵郡高千穂町押方の天文5年板碑は于支が年数と年の次の間にあって、江戸時代の造立と考えられる。③宮崎市池内奈古神社天正2年板碑はその形体に就いての表現中に竿とある故、六地藏碑と考えられる。従って、この3例は除外する。

元来、板碑は石造品とは云え、移動し易く従って現位置が必ずしも造立当初の位置のままとは云い難い。ただ中世の卒塔婆である限り墓埴の傍に置かれたもので、墓が共同の墓域乃至家墓制で被葬者の氏墓にあったものが、近世檀家制度の確立と共に、寺院の墓域に移動することは一般に考え得るところである。墓と無関係に遠くに移動するとすれば、庭園の一隅に風致を添える意味で使用された特異な例にしか過ぎない。以上の資料はこの特異な例に属するもの2、3の例を欠き皆無とその環境から私考される。また本稿の目標とするところは、これ等の仏教遺物を通して当時の宗勢を追求するにあるのである。

従って、ほぼ同一地域内の移動はさして結論に大きな影響を与えぬとの立場で、分布を取り扱うこととした。

広範囲の県・市の現在の行政区劃によって瞥見すれば、県北の延岡市・西臼杵郡と県南の串間市には1基の存在も報告されていない。他の所在の知られている区域で、県北の広い地域を占める東臼杵郡では五十鈴川・耳川の中流に8箇所15基が報告され、前記延岡市の北と西臼杵郡に接する西北部には全く分布していない。その南、日向市には海岸沿いと塩見川・耳川の下流に8箇所72基があって、全県の3分の1を占め、濃い分布を示している。県の中央部に当る宮崎市では大淀川下流に21箇所86基、その南・北の宮崎郡では一ツ瀬川の下流佐土原町、加江田川の中流清武町中心に9箇所16基が分布している。その北の児湯郡には分布の箇所こそ7とはなっているが、基数僅かに8と云う、点在の姿を示し、内陸部の東諸県郡には大淀川とその支流、本庄川の中流を主として7箇所11基が知られている。県南に属する西諸県郡には大淀川上流高原町、川内川の上流飯野町に3箇所3基の過疎地帯をなし、南那珂郡・都城市も同様に前者は1箇所1基、後者は2箇所3基、また北諸県郡は4箇所4基、小林市2箇所6基と分布稀薄である。これに対して海岸沿いの日南市は広渡川中流の飢肥町、小流伊比川の川口に近い伊比井に集中し、9箇所34基が挙げられている。以上の如く計132基がある。それ等の中に集中して見られるところは北に日向市があり、特に財光寺定善寺に21基と日知屋本善寺に29基、同細島妙国寺の10基があり、日南市伊比井本源寺の20基等あって、いずれも日蓮宗の題目板碑が圧倒的多数を占めていることに注目すべきであ

る。これ等から帰納して云い得ることは日向市、宮崎市、日南市の海岸、および、その河川の下流に多く、内陸部には稀薄であって、それも多くは河川に沿うて分布していると云い得るであろう。これは関東型のものが原石の緑泥片岩秩父に産するため、ここを中心として古いもの、大形品が発見され、当時の輸送の動脈としての河川に沿うて各地に分布している点と規を一にしているかの如く受け取られる。

宮崎県の場合は原石の大部分が砂岩で日向市に凝灰岩のもの稀れに含んでいる。この凝灰岩は日向市の北方五カ瀬川上流に産する様であるが、砂岩は日向市、宮崎市、日南市中心の第三紀層中に見られるもので、頁岩との互層となって幾重にも東に傾斜し、海中に溺れて青島附近ではその浸蝕に弱い頁岩層が失なわれて奇観を呈している。また日南方面では隆起して、河川によってはその互層の断面を露呈している。従って、頁岩との間に隙を生じて、砂岩の採石をば容易にしているのである。これが九州でも宮崎県に比較的多く、しかも前記3地区に集中した所以でもある。次に日蓮宗の板碑に就いて分布を見るならば、前記の如く日向市・日南市に濃く、特に前者は全体の7分の5以上を占めている。これは後述の九州の本山とまで唱えられた定善寺の存在によって首肯されるところである。日南市本源寺の大量な基数の存在を肯定させる文献的資料は現在廃寺寸前の状態でもあり、皆無に等しい。その他の地方は内陸部に多く、1～2基程度の存在が知られているに過ぎない。しかし、本源寺同様、その文献的な資料を大部分は欠き、それだけにまた資料的価値も高いと云わねばなるまい。

この分布をさらに年代を考慮に入れて観める、即伝播について考える必要もあろう。日蓮宗板碑の初現は現東諸県郡高岡町柳馬場本永寺(初めは佐土原)の応永8年(1401)板碑である。これ以前のものとして宮崎県内には8例のものがある。まず最古のものは日南市吾田上限谷歓楽寺の鎌倉時代末の正和4年(1315)のものである。吾田上限谷は細田川の支流に沿うた内陸部にあって、ここに、なお正慶2年(1333)の第4位相当のものがある。第5・7位のものもまた日南市の広陵川沿いの飫肥町吉野方にある。この飫肥地方からは北の海岸、伊比井川の小流の上流、天神尾に第6位のものがあり、その附近に永正10年を始めとする15基の題目板碑をもつ本源寺がある。次に第2位のもは大淀川下流右岸の宮崎市赤江町城ヶ崎宝泉寺に、第3位のもの同川の左岸同市浮城町正光寺に見られて、日南市より北上し宮崎地方に伝播していることが知られる。なお、この大淀川を遡った浮田の妙円寺には天文7(1538)年・永禄5(1562)年の題目板碑が所在している。さらに遡ると第8位の明德元(1390)年板碑が跡江に見られ、これに次ぐものが前記の現高岡町本永

寺(元佐土原)にあって、室町時代初めの応永8(1401)年の銘を有し、題目板碑の宮崎県内最古のものとなっている。要するに鎌倉時代末から本県では板碑の造立が行われ、南北朝を通じて日南・宮崎市内に分布しているが、その伝播経路を見るならば日南市方面から宮崎市と北漸の姿をとり、海岸沿い・河川の下流から上流への方を向とっていることが確認されたと思う。

日蓮宗の板碑に限って、その伝播を見れば、前記の応永8年の佐土原(現高岡)本永寺の宮崎市中心の分布圏のものを始めとし、これに次ぐものは日向市の塩見川下流の日知屋本善寺の寛正6(1465)年のものである。これは日向市中心の分布圏の初めとなるもので、これ以降22基のものが知られ、さらにこの附近の定善寺には永正11(1514)年を初め20基、妙国寺・同門前地藏寺に多くのものが発見されている。本善寺の寛正6年に続くものとしては、塩見川の北の五十鈴川はぼ中流に位置する門川町川内の文明5(1473)年のものがある。また、これに次ぐものは前記日南市中心の分布圏に入る伊比井本源寺の永正10年(1513)のもので、次に宮崎市中心の分布圏の一ツ瀬川中流の新富町新田本蓮寺の永正15(1518)年のもの、大淀川下流の宮崎市生目妙円寺址の天文7(1538)年のものがある。尋いで、日向市中心の分布圏の海岸に面した美々津町に天正3(1575)年があり、最後に都城市宮丸の二巖寺に慶長17・18(1612・3)年のものが発見されている。ここは大淀川上流にあるが故に宮崎中心の分布圏に入れる可きであろう。これからして題目板碑はまず、宮崎市中心の分布圏に始まって、日向市中心の分布圏に移行し発展しているのである。

宮崎県内の板碑の伝播は日南市中心の分布圏に始まり宮崎市のそれを経て、日向市中心の分布圏へと北漸しているのである。従って、題目板碑は宮崎市中心から日向市中心の分布圏への推移期に当たっていることが知られる。

この宮崎県内の板碑の伝播の北漸の傾向は、当然より古かる可きものが大隅国(鹿児島県はぼ東半)に所在することが想定される。しかし、現在この地方の充分な調査の報告はなく、鎌倉末期⁽¹⁵⁾のものが古いものとして報告されているに過ぎなく明確さを欠いている。北方の豊後国(大分県)では北漸的傾向からは室町時代頃から発生すべきも、日名子太郎氏『大分県金石年表』・服部清五郎氏『板碑概説』『大分県史跡名勝天然記念物調査報告』第5輯等よりすれば、宮崎県最古の正和4(1315)年に先向することほぼ50年に近い文永5(1268)年のものが知られている。その所在は最古の笠塔婆を持つ富貴寺であって、また、ここを含む国東半島には独特な国東塔の誕生の地でもある。これに相応しく附近の露山門に建武1(1334)年、その東の海岸に接する国東川原に文保3(1319)年・元応2(1320)年・正中2(1325)年板碑があり、附近

に建武（1334）年、その北の富来に元亨2（1322）年のものがある。さらに武蔵川上流安岐町に永正4（1508）年と杵築市梅遊寺に応永20（1418）年板碑があって、鎌倉末期から室町中期にまで造立され、また伝統の強さが感ぜられる。この国東半島中心の文化圏の外廓としての宇佐郡安心町佐田暦応4（1341）年、速見郡中山香に貞和1（1345）年、永和4（1378）年の南北朝期のものが存在している。大分郡植田小林寺に貞和（1348・1350）年代のもの5基と、次に大野川上流の大野郡緒方町に元亨4（1323）年の鎌倉末期のもの同郡朝池町上井田に暦応2（1339）年、緒方町自在に天授（1375～）年間と南北朝期のものが知られ、室町期のものはこの大野郡に13基も報告されている。その西の竹田市に室町時代のもの4基と熊本県に接した日田市南友田には磨崖の康永3（1344）年在銘のものが知られ、この磨崖のものを除けば国東半島から、やがて南の大野川上流の大野郡にさらに西して竹田市（旧直入郡）へと伝播しているのである。これを以て見れば、宮崎県の伝播の方向とは何等脈絡がないことが知らよう。また、豊後型板碑の碑面彎曲する特徴も宮崎県のものに見られぬこと、両県の接する地域は殆んど丘陵によって阻まれ、中世村落の発展も考えられず、事実この地域に板碑の造立を見ないのである。従って宮崎県内の板碑は北漸の傾向を持つことのみを確認し、その伝播に就いて他地方からの影響ありとすれば後致に待つこととする。

形 体

形体に就いては冒頭述べたところで、題目板碑のみに関する本稿からは敢えて項を設けて述べる必要もないが、この宮崎県の板碑について概観は勿論、論考は未だ寡聞にして接していない。幸い前出『日向の金石文』には高さ・幅・厚さ・額の出に就いて記述しているので、やや詳細に題目以外のものも含めて記し、諸賢の参考に資したいと思う。

まず、高（長）さを見るならば、殆んど土中に脚部を埋

めていて、地上の寸法を知るに過ぎぬため正確は保し難いが、ほぼ平均107cmで、最も高いもの11例を便宜上表示するならば、第一表となる。

以上の中、(7)の正慶2年在銘のものは欠除した額を他の同期の数例を基として、全長を推測すると177～180cm位となる。また(6)も横線以上を欠く故、これを復原するならば199～cmと見做される。以上の中に鎌倉期末南北朝までの8基中5基が含まれていること、永禄・慶長の2基を除き4例は当県の板碑全体の前半に属しているのである。これによって古いものは一般に高いものと云い得よう。(1)の慶長7年のものの銘中に稲津掃部助の外4名の武士的俗名が見られる。稲津掃部助は名を重政と云い、清武城主で、『日向纂記』には、慶長5年関ヶ原合戦の後、大阪方の宮崎を切り取り武功をたて、同7年伏見城の経営に当って手伝を命ぜられ、6月普請夫600人を率いて上洛し、10月1日帰城した。彼は12日権勢を悪む者のため誅せられることに定まり、清武城に楯籠ったが程なく切腹するとある。銘に10月18日とあって、中心部に僧侶の戒名あるところをもってみれば、その切腹の時はこれ以後と私考される。斯かる一城の主で、しかもこの地方では権勢並ぶ者なき人物とすれば、当然一般のものを越える大形のものが造立されたとして不思議ではあるまい。(2)は日蓮宗でも格式ある大寺に属し、創建者は日朝と云い日向の法華諸寺の総管となったことから大形であることは、寺格に相應しいものと見る可きであろう。(3)の永禄13年のものには桂月宗丹の曹洞宗的戒名が見え、上方に珍らしく10cm程凹めて菩薩形の仏像を陽刻した入念なものである。その所在景清廟となっている。この景清は『平家物語』に見る悪七兵衛であって、北方から生目に亘る莊園を領有していたとも云われ、後世までこの地方人士の尊崇を受けていたものであろう。この板碑が必ずしもこの廟なり景清に間接的にも関連すると考えられぬが、桂月宗丹は造立者に相應しい人物であったものと想像される。慶長7年の最長のものと共に清武町のその清武城址にある大永4年のものは総高223cmであるが、身部に左右6cmの縁取をし、その内側6cmを彫り凹め、ここを3段に区別し、上段に蓮台と円付き相の弥陀3尊種子を置き、中段に銘文と五大種子を刻み、下段に蓮華を配した変形なものである。従って一応省略した。これは銘文によれば、長倉若狭守、垂水但馬守を供養したものであるが、長倉氏は清武城主と考えられる、従って城主に相應しい大形のものが造立されたのであろう。

次に最も短いものを10例挙げるならば、第二表のものが挙げられる。

以上からすれば鎌倉末期は勿論室町初期に該当するものではなく、当県の板碑の前半に属する永正、大永、天文

順位	年 代	高(長)さ	所 在
第一表 最長 の 板 碑	1 慶長7(1602)年	262cm	宮崎郡清武町上加納
	2 応永8(1401)年	215	東諸県郡高岡町本永寺
	3 永禄13(1570)年	201	宮崎市北方景清廟
	4 天正11(1583)年	190	宮崎市生目中福良
	5 嘉暦4(1329)年	172.7	宮崎市吉村町浮城正光寺
	6 永正11(1514)年	168.2	宮崎市赤江郡司分
	7 正慶2(1333)年	158.4	日南市隈谷上隈谷歓楽寺
	8 貞和4(1348)年	156.8	日南市飢肥町吉野方
	9 大永4(1524)年	155	東臼杵郡門川町福寿寺
	10 嘉暦3(1328)年	151.5	宮崎市赤江城カ崎泉宝寺
10	明德1(1390)年	151.5	宮崎市生目跡江

順位	年 代	高(長)さ	所 在
第 1	天文12(1543)年	44.0 cm	東白杵郡東郷町山蔭日田尾
二 2	天文12(1543)年	46.0	同 上
表 3	慶長 8 (1603)年	51.5	同 上
最 4	慶長 2 (1597)年	60.1	西都市三納村時宗仏堂
小 5	大永 5 (1525)年	63.6	日南市伊比井本源寺
の 6	天正20(1592)年	64.2	日向市日知屋本善寺
7	永正15(1518)年	64.5	児湯郡新富町新田本蓮寺
8	文禄 2 (1593)年	65.1	宮崎郡清武舟引神社
9	元亀 3 (1572)年	65.7	日向市財光寺定善寺
板 10	慶長 2 (1597)年	66.6	西都市三納村時宗仏堂
碑			

の4例があるが、他は終末に近いものである。これ等の内(4)・(10)の西都市三納は山寄りで原材には余り恵まれぬ地方であって当然であろう。他は原石豊かな地方であるにも拘らず短い。これは年代降るもの平均して短い傾向にもよろうが、さらに宗派色・地方色も認めざるを得ない。前者では時宗・日蓮宗が大部分を占め、後者では本源寺の例を見るならば、前半に属する永正10年、大永5年の如きは60cm代で、すべて14例共86cmを超えぬのは、その好例と云えよう。

題目板碑に就いて見るならば、当県板碑のほぼ全体の40%を占め、その中最も長い11例中に、僅かに1例最古のものが存在するに過ぎなく、また当県板碑の長さの平均値107cmを越えるもの13基に過ぎないことは、全体として短いことを示しているものと受け取られる。また前出の如く最短の10例中に3基あること、また終末期のものほぼ90cmで、量も多数占める点から、ここに題目板碑は一体に小形であると判断し得よう。

要するに長いものが古いものに多く、時代降ると短いものが多い傾向は関東型にも通ずるものである。また原材の乏しい地域には小形なものが多く、特に多数造立されている地域に小型化が目立つ。なお関東型に見る長短のずば抜けた数値を持つものは殆んど見られない。

幅は長さに関連して始めて、その広狭を知りうるし、厚さも幅に関連して、その厚薄の度を知りうる。この関連を調べてこそ意味があろう。従来板碑の寸法に就いての記述はあるが、考察は極めて稀れである。筆者はこの長さ、幅、厚さの関連に就いての追求を試みることにする。

ただ長さは地上だけのものである点で正確とは言い難いが何程かの傾向は知り得ると思う。まず①長：幅、②長：厚、③幅：厚さを求め、次に各部の平均値に近い数で大を○小を●と区別すれば、①では3.7と3.8、②では5.5と5.6、③では1.7と1.8をその区分の境とすると、その組み合わせから8つの型が生れる。しかし実際には①が●②が○③が●に該当するものはなく、次の7の型が見

られた。A型は○○○、B型は、●●○、C型は○●●、D型は○○●、E型は○●○、F型は●●●、G型は●○○となる。県内の題目板碑造立以前のものの中、最古の正和4年と次の嘉暦3年の2例は厚さが記録されず、従ってその型は確定し得ないが①が小さいものは、永正頃までの古例から推測するならばA型に属し、嘉暦4年のものはB型に相当するのである。古くA型が行われ、尋いでB型が盛行し、前者は当県板碑造立の後半に多く、後者はこれに反して前半に多いが、共に一般的な型と云えよう。この両者の中間型のG型とこの型とは正反対のC型とが、次に行われている。またG型は前半に、C型は後半に集中している。D・E・F型は共に遅れ、それだけに後半に多い。題目の板碑に限って見ればA・B型共に23基で最も多く、B型では全体の半以上を占め、A型は半に近い基数を持っている。E・G型は4基で、特に前者は全体の半に当り、F型は3基、D型は最も少なく僅かに1基に過ぎない。かく量の多少はあれ、各型に亘っている。

前記の長さの長短を、この型に関連させて見るならば、長いものは、その前半に少数ながら幅の広いA型も見られるが、B型の細長いものが圧倒的に多い。またA・B型に占められているため方柱に近い形をなしている。これに対し短いものは、当然づんぐりしたA型が多く、A型に近似はするが厚さの薄いD型も相当含まれている。

この型を、また時間的に見れば古いものG型にも窺える通り厚味のある点が特色と云えよう。時代降る後半のものは厚さ薄いC・D・F型に集中している。

地域中心に求めるならば題目板碑のI・B・D・E地域は基数多いため客観的な観察がしうるのであって、I地域にはA型が後半に多く、B地域には時間に関係なくA型が多い。D地域にはB型があるが、A型は認められない。E地域は前半にA型が少数ながらあって、多くはB型である。かく地域差が認められ、特に同じ日向市の中のI・B・E地域にそれぞれの差があって、その伝統の根強さが知られる。

圭頭部を形成する三角形の頂部と2条の横の溝部とこれに続く外側に突き出た額について、その長さを実見した少数の題目板碑に就いて検討する時、ここに頂部が最も長く額部がこれに次ぐもの(I型)、同じく頂部が長く溝部がこれに次ぐもの(ロ型)、額部が長く頂部がこれに次ぐ(ハ型)の3型に分類し得る。I型では一般に頂部5割前後、溝部は2割に近く、額部は3割前後となるが、さらに細かく観察すれば、本善寺のものは本源寺のものより頂部短く、額が長い。ロ型では頂部5割、溝部3割、額部は1～2割の比率となっているが、本源寺のものは額部、妙国寺より短い。またハ型では一般に頂部ほぼ3割、額部は5割前後、溝部は2割に近く、本善寺と妙国

寺とを較べると、前者の溝部は短い。ここに地域差が認められる。(第三表参照)

イ型は本善寺・本源寺・妙国寺門前に見られ、前者が古い。ロ型は本源寺と妙国寺・同門前にあって、前者が古い。ハ型では本善寺と定善寺・妙国寺に分布し、前者が古く、定善寺の1基を除き各地域に2型式が見られて、1型式には終始していない。この各地域の前後を見ると、本善寺ではハ型がイ型に先向し、本源寺ではロ型がイ型に先向し、妙国寺ではハ型がロ型に、妙国寺門前ではロ型がイ型に先向している。ここにハ型(2がその代表例)からロ型(5が代表例)に、さらにイ型(21が代表例)へと型式の推移が見られるのである。

また頂部に就いて幅と高さから三角の頂角を求めれば、各地域の時代降るイ・ロ型中、古いものは鈍角でなだらかな傾斜をなし、新しいものは69を除けばすべて鋭角となっていて先が尖っている。しかし前記イ・ロ型に先向するハ型は、これとは全く相反し、古いものが鋭角、新しいものは鈍角を呈している。この相反する様相は如何に解す可きか、今その成案は得ていないが、長さとの関連は一応考え得るが、これとは結果として都合よき数値は得られていない。また前記の長さ・幅・厚さの比率による7型式に関連づけて観ても何の明瞭な差異も得られなかった。ただ強いて求むると鋭角のものの幅と厚さの比は厚味が比較的薄いことを示している。鈍角のものは長さとの比が側面から見て即厚さが厚いことを示しているかに受け取られる。

古い鋭角のものは本善寺のハ型から始まっている。ハ型は額部長い、従って額長く、厚味のあるものとなり、所謂碑伝に相通ずる感じのものである。次に見られるものはイ・ロ型で頂部の三角形の部分が鈍角をなし頭部大きく、また薄手なもので所謂板状の板碑に相通ずる感を与え、これに次ぐものはイ・ロ型で、鋭角のものが即三角部長く、なお厚味のあるものである。かく型の中に地域性も見られるが、また角度の面から見る時地域を越えて、鋭角→鈍角→鋭角の傾向が窺われる。

また三角部は方錐状をなすものが多い中に、駒形(切妻の屋根形)様のものが本源寺に見られる。本源寺には頂部の山形の稜は直線をなさず、やや膨らみをもつもの稀に見受けられた。その下部の二条の横溝は殆ど逆切込みによるが、それは正面ばかりでなく、本善寺には左右側面にまで及ぶものがある。さらにその下の額は殆ど突き出ているが、本源寺の文禄3年のものはこの部分を横線をもって劃している稀らしいものである。身部下方には額部同様張り出しの部分がある。脚部は繰出しを持ち、鞘によって建てる仕組みをもったものがある。また身部には一体に関東型の如き縁取りを施したものは、都城市二厳寺に見られるに過ぎない。

銘 文

大分県・宮崎県等の金石文にはまま墨書銘があるが、当県の題目板碑の銘はすべて陰刻銘によるものである。その銘は身部正面に見られるが、厚味のあるため、関東型には見られぬ側面に刻むものが、時には見受けられる。題目板碑中の本源寺の(16)の永正16年、(17)の大永5年、(20)の大永8年等はその例である。碑身中央の上方には当然ながら本尊の7字題目が配されている。定善寺の(86)の天正5年5月24日板碑は当山九日現阿とあって、確かに日現は当寺歴代の9世で、この年月日に寂している。従って日蓮宗のものとして題目を欠くが取扱った。この題目は殆んど所謂髭題目風であるが、妙国寺の(80)の慶長18年のものには楷書体で刻まれている。様式上関東・下総型に多く見る釈迦・多宝を加えた題目3尊式のものではなく、殆んど一遍首題のみのものである。僅かに二厳寺の(78)・(81)の慶長年間の2基のみが十界曼荼羅の形式となっている。(81)のものは一般の座配と趣を異にし、四天王は1行に「四大天王」とし、最上段に日月星の星辰崇拝の対象である三光天子と肩を並べ、その下に南無の尊称を省いた釈迦・多宝を左右に配している。なお天竜八部・地神天神・正八幡宮等とも表現されている。また鬼子母神・十羅刹女が他の(78)にも見られる点は現世利益を求める当時の風潮を如実に示しているものと云えよう。

次に造立者について一瞥すると、当然僧侶と見られる(9)の沙門日義、(12)の阿闍梨日口、(81)の日清大徳等見え、上層の身分のものによる場合もあり、(49)の如く沙門日拾のために弟子が造立せる場合もある。また(53)には蓮浄のため日高惣右衛門尉と云う上層武士が建立せる場合もある。同じく(32)には悲母妙金のためとして平朝臣なるもの場合も見られ、当時の信徒層も窺われる。しかしこれは高価な石製塔婆なるため、それに相応しい階層の信徒にして始めてなし得るところで、これ等の人物以外の多くの庶民階層の信徒の存在を勿論無視し得ないところである。被造立者に就いても同様なことが云い得るが、(19)の開山日興を始め日要等日向の富士門流発展に貢献せる名僧のものも見られる。なお、(25)には伊東祐昌の名を見るが、彼は伊豆の伊東氏の流れて、祐国の弟で、兄戦死の後大友氏に通じ家を危くする者として、文明18年本善寺所在の日知屋で害されている。なおここは祐国の25年忌に当る永正6年に城衆が建てた板碑が造立されている。これを持って見れば領主の外護に本善寺はよっているとも考え得る。

その造立の日に就いては種々立場によって異なるであろうが2月・8月の彼岸の中日即時正と記したものが目立って多く、また(51)の35日、(22)の百ヶ日、(82)の2(3

であろうか)忌,(52)の33回忌等がある。生前供養即逆修多いが、中に同意の七分全得の名称が(57)に見られる。

この銘文中、特記すべきは題目の板碑86基の3分の2を占める58基に経偈が表わされていることである。関東型板碑の筆者の資料312基中経偈を持つもの、そのほぼ1割の33基に過ぎないことを思えば、その量の多いことは特色の一つと認めざるを得ないであろう。これ或いは一遍首題にのみ限るため、左右の空間をうめ調和を計ったのであろうか。この経偈を分析すれば迹門中7品が26基に用いられている。(第四表参照))その中当然ながら方便品が多く用いられ、提婆品がこれに次ぐが、この品は関東型には見られぬものである。この品の性格から当然女性の板碑に多く見られる。後半の本門については4品だけ採られ、30基に現われている。しかし神力品が19基の最多数を占め、これに反して、中心ともなるべき寿量品が僅かに7基に留まっていることは解し兼ねる。この点関東の資料も同傾向をとる。これ或は深い教義よりも現世の利益を求めた結果か。本源寺に迹門の信解品方便品を用いたものが各1基あるが、他の5基はすべて本門に属するもののみである。本源寺と余り距たらぬ妙国寺に日要追善のための永正11年(7)の板碑がある。彼はこの妙国寺所在の細島出身で、この日向で活躍し、本山安房保田吉浜の妙本寺11世となった学僧である。この板碑に本門の神力品が記されている。本源寺大永5年(17)のものにも日要上人とあって本門寿量品の偈がある。なお同年(15)のものに日目上人追善のためのものがあり、願主日要とも読み得るものである。或いは願主と結び付けるとすれば、彼の示寂後のための造立となる故理解出事ぬため、日要も含めて供養したものであろうか。また本蓮寺の永正15年11月10日の紀年のものに(13)為日要上人と刻めるものがある。日要は永正11年11月16日示寂しているため、6回忌辰に当って造立したものであろうが、これには迹門品譬喩の偈が用いられていて、これのみ前記のものと様相を異にしている。ともかく日要と関係ある本源寺に本門を重視している傾向が見られる。また彼の生存中活躍せる頃の(2)から、死後影響を与えたと見られる(17)までの偈を見るならば、迹門の偈を用いたもの前記本蓮寺の(13)のみで、他のすべてのもの即(2)・(6)・(7)・(10)・(11)・(12)・(16)・(17)はすべて本門の偈を刻んでいるのである。年代的に偈頌を見れば、その初期は斯くの如く本門が重視されている。しかし中頃には迹門が多用され、後期に入って、やや本門を多く見受けるのである。この変化は何によるかは重視せねばならぬであろう。学僧の当地方に多く、また中頃本山妙本寺との疎遠関係も見られるところに、問題の鍵があるものと予想もさもされるが、今後の課題として置きたい。銘文ではないが、額の部分に円相を刻むものが多く、定善

寺の永禄6年(36)・元龜3年(48)、妙国寺の永禄11年(40)・(41)、本善寺の永禄11年(43)、地藏寺址の永禄10(38)等はその例である。これは何を意味するかは明確ではないが曹洞宗の墓碑に屢々見られるものである。当地方の曹洞宗の発展は後述するが驚く可きものがあることを背景として、当時の民間の信仰の実態を考えねばならぬであろう。

宗 勢

最後に以上の資料から日向(宮崎県)の日蓮宗の宗勢を考えてみたい。まず板碑の基数を見るならば、現在知られているもの219基の中題目は86基であって3分の1を占め、曹洞宗と認められるもの49基、天台宗16基、真言宗22基、その外天台か真言か判定の下し難い密教系のもの7基となり、その他浄土系のもの等を主として12基となっている。以上からしても日蓮宗の中世の発展が窺えるが、これには単的に板碑からのみ云々し得ない面もある。それは日蓮宗は専ら塔婆として板碑を用い、これ以外には古くから少量ながら五輪塔が用いらたに過ぎなく、他宗にあっては五輪塔以外に国東塔・宝篋印塔・六地藏碑・笠塔婆・多宝塔等の形に変化のある、それだけに多くの工程を経た、また時日を要した石造品が使用されているのであることを無視し得ないのである。次にその分布を見れば題目板碑は日南市に1ヶ所15基、日向市は6ヶ所64基とこの地域に集中していて曹洞宗の如く万遍なく散在せず、関東同様の相を示しているのである。特に日向市に圧倒的多数を占めている点に注目せねばならぬであろう。

日蓮宗関係の金石文資料として、まず第一に挙げられる可きものは本善寺の永和5(1379)年の五輪塔である。銘は水輪にあって、ここに日郷聖人と彫られている。日郷は文和2(1353)年4月25日寂となっている故、これは27回忌に当って造立したものである。彼は日興門下の日目に師事し、重須談所に学び、日目に仕えて京都に行き、日興の遺骨を埋葬し、帰って後留守居の日道との間に大旦越南条家の家督の相続をめぐって争い。後に房州保田吉浜の地に妙本寺を創建しているのである。従って直接には日向には足を入れていないとも云われている。しかし定善寺の開山日叡の年譜によれば日郷元徳元(1529)年日向に下り、行騰山の別当の現日向市細島日知屋財光寺の薩摩法印(後の日叡)を論伏し、法印は元弘1(1331)年阿弥陀堂を法華堂に改め、翌年冬同志18人と共に大石寺に登り建武元(1334)年に日郷に帰依して日叡と改名するとも云われ、また元弘3(1333)年日能の教化によって日叡は阿弥陀堂を法華堂に改めたとも伝えられ、その伝区々として明らかではない。いずれにせよ日郷の弟子であったことは誤りはなからう。彼は仙代問答で名高い日仙

を師とし、次いで日道の弟子となり。さらに日郷の門下に入るとも云われているが、日郷保田妙本寺創建するやその下において師事し、日郷の晩年日伝(妙本寺二世)を輔佐し、日郷滅後には日向に帰り日向惣導師として、また伊東氏の外護によって大いに教線を張り、寺名も財光寺から定善寺と改めたのである。また18支院を擁したとも云われている。しかし文和3(1354)年支院も含めて焼亡している。応永2年の五輪塔もあれば間もあれば間もなく復興したものであろう。明応9(1500)年には平賀二郎三郎からの田地の寄進もあり、旧観に復したものであろう。なお日叡は建武2(1335)年に本善寺を創建しているのである。従って南北朝期の前記の永和5年の五輪塔も見られ、日叡の師日郷の名も見られるのであり、題目板碑の古さの点で第2位にある寛正6年のものが発見されているのである。

題目板碑最古の応永8年のものは本永寺に発見されている。この本永寺に就いては前述したところであるが、ここも日郷と関連するのであって、彼が学頭職として下らんとしたが妙本寺創建のため果さず、弟子の日朝に学頭職を譲った。日朝は佐土原に当寺を創建したものと云われている。また後に保田妙本寺11世日要は学頭職を日杲に譲っている。従って学頭職即総監なる故、その支院も12を算えるに到ったものであろう。

妙国寺の所在する細島に日要生れている。従って日要の力によって妙国寺が生れたものであろうか。彼は児湯郡新田に文明18(1486)年本蓮寺を創建している。また前記の如く本源寺の板碑に日要の名を見るところから、ここも日要有縁の寺であろう。

以上の如く本山妙本寺の住職日郷の高足日知屋の日叡、同じく日向細島において学頭職を務め、本山妙本寺の歴代となった日要共に学僧として多くの著述も残しているが、日朝・日杲の傑出した学頭職の力が、かかる発展を招来させたものと私考される。

島津氏は歴代真言と禅宗に帰依していた。禅宗も室町初頭に一族出身の石屋真梁出てからは、一族を背景として伸び、更らに元久の子仲翁守邦現われては臨済は勿論真言宗も圧せられ、特に真宗には禁圧が加えられた。しかし秀吉の征薩に当って真宗僧侶の内応するものあって、秀吉の保護を得て教線を拡張していった。従って日蓮宗はこの島津氏領内では教線延びず、北方日向市方面で活躍し得たのである。

結 び

以上を簡単に纏めて見ると、

1. 題目板碑は室町時代初期から出現し、天正以降その量を増し、その量に於いて当県全体の半以上を占めていて盛行し、日蓮宗としては最も利用された塔婆

形である。

2. 板碑の初現地域は日南市文化圏であって、ここから宮崎市文化圏に及ぶのであるが、題目板碑は宮崎から日向市文化圏への移行期に始まっている。
3. 他地方より板碑の基数の多いのは、この3文化圏の海岸沿いの岩質が原材の砂岩が入手容易である点とここに日蓮宗寺院の位置が一致したことによる。
4. 形体については題目板碑なるが故の独自の要素は見られない。これはいずれの地方にも見られる現象である。
5. 本尊は2基の十界曼陀羅系を除き、1遍主題のもののみで、3尊形式のものは見られない。
6. 経偈が題目板碑には多く用いられ、その初期的なものは本門が用いられ、中間には何の理由によるかは知られぬが迹門が多く、やがて後期に多少本門が多くなる。経偈は神力品が多く、現世利益を求めた室町後期からの一般的風潮を示している。
7. 造立・被造立者の身分は関東よりは上層と見られ、武士と思われる戒名・俗名が顕著でこれも檀越・外護者として日蓮宗発展に寄与したものと見られる。
8. その分布から見ると日向市に集中し、島津氏領内を避けているかに受け取られる。

- 注(1) 題目板碑に就いて 銅沢第4号(昭9.9)
 題目板碑を見て 道人第2号(昭9.11)
 題目板碑について 大崎学報第84号(昭9.12)
 題目板碑 武蔵野第42巻第3号(昭38.6)
- (2) 下総型題目板碑考 立正史学第28号(昭39.3)
- (3) 豊後に於ける板碑様の古碑 歴史地理第21巻第5号
 豊後に於ける板碑系の碑 歴史地理第23巻第3号
- (4) 福岡附近に於ける板碑と五輪塔との関係
 考古学雑誌第7巻第10号
- (5) 大隅に於ける九州系統の板碑
 考古学雑誌第7巻第11号
- (6) 天草の板碑 考古学雑誌第13巻第6号
- (7) 筑前国鞍手郡下境村須賀祠畔建武の板碑
 筑紫史談34
- (8) 綾・杉・立石・板碑について 筑紫史談39

第三表 頂部(三角部、溝部、額部)の型式

型	イ	ロ	ハ
寺名			
本善寺	(21)50-19-31 F 98°24' (32)39-28-33 G 101°24'		(2)40-15-45 A 82°12' (19)39-10-51 A 82°12' (22)41-13-46 B 80°24' (23)31-15-54 G 99°36' (24)25-19-56 G 118°48' (25)32-19-49 111°36' (28)34-28-38 E 119° (34)36-13-51 A 109° (67)33-17-50 A 113°
定善寺			(48)27-17-56 E 129°
本源寺	(57)53-22-25 F 89°48' (68)56-15-29 F 82°12'	(5)42-38-20 G 100°52' (15)54-25-21 B 102°24' (55)39-37-24 B 105°48' (58)50-26-24 C 89°24' (69)47-27-26 C 99°36'	
妙国寺		(41)61-29-10 B 61°24' (64)53-32-15 A 83°36' (73)62-29- 9 A 68° (80)54-37- 9 E 81°	(37)33-20-47 B 120°12' (42)33-20-47 B 120°12'
同門前	(72)50-17-33 A 81°24'	(70)49-37-14 B 74°12' (82)55-32-13 C 80°	

1. () は資料の年代順の番号
2. 三角一溝部一額部の百分比
3. ローマ字は長、幅・厚さによる型の符号
4. 三角部の角度

第四表 経筒、各品の使用基数

	妙国寺 門前	地藏寺	本蓮寺	高松	妙円寺	妙国寺	本源寺	定善寺	本善寺	
方便 比喻 信解 薬草 化城 宝塔 提婆	72	38	13			37 80 65 41 42	57 54	50 9 45 30 47 18 46 31 33	35 26 28 43 71 19 32	迹 門
湧出 寿量 法師 神力 不明	70 82			52	29	40 7 64 35	15 17 55 16 53	39 22 27 6 44 10 48 11 49 12 85	2 67 24 26 51 60	本 門
	1	1	1	0	0	5	2	9	7	迹
	2	0	0	1	2	4	5	8	9	本

数字は資料の
年代順の番号